



# しずがわ

## まなびフェスト(学校の取組) 年間評価

<数値の見方>

児童…まなびフェストに掲げられている項目の評価指標の達成状況 n=163

教職員…まなびフェストに掲げられている項目についての取組に対する評価(肯定回答の割合)n=20

保護者…まなびフェストに掲げられている項目についての学校の取組に対する評価(肯定回答の割合)n=72

### 1 「みずから学ぶ子ども」

※網掛けは目標達成、中間評価との比較…+赤、-水色

No	項目	児童	教職員	保護者
1	主体的に学習に取り組む児童を育てる授業づくりを推進します。 ※児童アンケート「授業では、進んで学習に取り組んでいますか。」の肯定評価 90%以上	91 (+3)	95 (+15)	91 (-1)
2	学年に応じた家庭学習の習慣を身に付ける取組を行います。 ※家庭学習定着週間がんばりカードの自分のめあて達成率 80%以上	91 (+1)	85 (+10)	89 (+5)
3	本に親しみ、望ましい読書習慣を身に付ける取組を充実させます。 ※読破目標達成率 80%以上(1,2年 70冊,3,4年 50冊,5,6年 30冊かつ 3,000p)	58 (-15)	50 (-20)	76 (-9)

#### No. 1 「主体的に学習に取り組む児童を育てる授業づくりを推進します。」について

児童の主体的な学習の取組を図ることをねらい、UDL(学びのユニバーサルデザイン)※1を研究テーマに掲げ、日々の授業改善に取り組んでいます。今年度は学校公開研究会において明らかになった成果と課題を整理しながら、授業づくりについてより児童がより主体的に学習に取り組めるよう改善を図っているところです。表を見ると教職員のみが中間評価よりプラスの成果を実感している結果となっており、子供たちやお家の方々には実感として「主体性」が育まれているとは感じにくいものとなっているようです。しかしながら90%以上を維持していることは評価に値するものとし捉えているところです。来年度はより子供達自身が「主体性が育まれていること」が実感できたり、家庭で主体的に行動する姿が見られたりするような取り組みについても考えていく必要があるようです。また、引き続き懇談や通信等を通して学校で主体的に活動する子供達の様子をお届けしていきたいと考えています。

※1…UDLとは、『多様な特徴を持つ児童生徒が教室で学ぶことを阻むバリアを最小限に抑え、すべての児童生徒が最も効率的に、自分に合った、効果的な学習を実現できるようにするための、学習環境デザイン』のこと

#### No. 2 「学年に応じた家庭学習の習慣を身に付ける取組を行います。」について

家庭学習定着週間の取組や担任の指導、評価がきちんと行われていることについて、保護者の皆様からは概ね高い評価をいただいています。また、「宿題はやるという習慣がついた」といった嬉しい声も聞くことができました。しかしながら、中間評価でもお知らせしました通り、「自分から進んでやらない」と言った課題をもったお子さんはまだまだ多いようです。岩泉小学校では、岩泉中学校と連携を図りながら「家庭学習」の取り組み方について交流を図っております。中学生が取り組んだ「自学ノート」の写しを校内に掲示し、小学生に見てもらうなどし、学習意欲を高めようとして取り組んでいます。また、同様に中学校内にも小学生の「一人勉強ノート」の掲示がしてあります。昨年12月に岩小の教職員(ほぼ全員)が岩泉中学校へ訪問し、岩泉中学校区全体の児童生徒の学力向上を推進するためにどう取り組むべきか話し合う研究会を行いました。そういった交流を今後も継続していきたいと考えています。「主体的に学習に取り組む児童(生徒)の育成」は、両校に共通のテーマでもあります。中学校と手を取り合いながら「岩泉」の子供たちの「主体性」を育ていけるようより一層効果的かつ持続可能な取り組みを模索していきたいと思っております。

#### No. 3 「本に親しみ、望ましい読書習慣を身に付ける取組を充実させます。」について

今年度の大きな課題はこの内容についてでした。子供、保護者、教職員のそれぞれが課題意識をもっている項目です。中には「読書の習慣が付き、進んで読書をするようになっていきます」といったご家庭もありましたが、全体の結果は表のとおりです。校内の会議でもこのことについて情報交流を行いました。すると「取組は様々な工夫をし、積極的に行っているがそれが読書量に直結していない」という結論に至りました。そのためには何をどうすべきかについて議論を重ねています。ある意味で救いなのは子供たちも「あまり読書をしていない」と実感しているという点です。子供たちも「もっと本を読んだ方がいいのかも」と感じている児童は決して少なくないと思えることができるからです。「本を読まなければならない状況に追い込む」のではなく、「読みたくなる」条件を整えるために何をすべきかを整理していきたいと考えています。

### 2 「思いやりのある子ども」

No	項目	児童	教職員	保護者
4	自分から進んで元気なあいさつができるように指導します。 ※児童アンケート「自分から進んで挨拶することができている。」の肯定評価90%以上	87 (-5)	95 (+15)	96 (-2)
5	前向きな言葉かけやクラス会議による児童の信頼関係の構築に努め、児童の自己肯定感を育みます。 ※児童アンケート「自分にはよいところがある」の肯定評価 90%以上	78 (-4)	95 (+5)	97 (+2)

6	<b>異年齢集団活動を充実させ、人間関係を深めます。</b> ※児童アンケート「掃除やキッズタイムの時に違う学年の人と協力して仲良く活動することができたか。」の肯定評価90%以上	95 (+3)	80 (±0)	100 (+2)
---	--	------------	------------	-------------

**No. 4 「自分から進んで元気なあいさつができるよう指導します。」について**

中間報告と比べて教職員は15%上昇しました。継続して指導してきた結果だと思われま。一方で児童はマイナス5ポイントとなっており、意識的に自分から進んで挨拶ができるように今後も継続指導が必要です。校内の廊下で大人（教職員のみならず業者などの来校者にも）と出会ったときには挨拶をするように子供たちには声掛けをしています。自然に声が出てくるように今後も習慣付けていきたいと考えています。中間報告でも申し上げましたが、ご家庭でも引き続き、「おはよう」だけでなく、「いただきます」「ありがとう」「おやすみなさい」「行ってきます」「ただいま」等の挨拶が生活の潤滑油になるということ、相手への気遣いや敬意の表現であることを改めてお話ししていただければ幸いです。

**No. 5 「前向きな言葉かけやクラス会議による児童の信頼関係の構築に努め、児童の自己肯定感を育みます。」について**

本校では、前向きな言葉かけ（ペップトーク）を通して、児童と教師、児童と保護者の信頼関係の構築を図り、児童の自己肯定感を高めることに重点をおいてきました。アンケートの結果を見ると、教職員と保護者は肯定評価が目標値を達しているにも関わらず、児童の意識はまだ低い傾向にあります。ペップトークやクラス会議の取組自体は浸透しているものの、それが「自己肯定感」に直結していないのではないかと考えられます。そこで今後は自分自身も「よさ」をさらに実感させていきたいと考えています。ペップトークやクラス会議の取組はあくまでも手立てです。この手立て自体が目的にならないよう、一人一人の承認欲求を充足させながら自分自身の「よさ」が実感できる実践が今後の鍵になってくると考えています。今後も引き続き児童一人一人の思いを受容しながら、適切な場面での励ましや承認の言葉かけ、そして、自己肯定感が高まる場面設定等、幅広く実践の場を広げていきたいと考えています。

**No. 6 「異年齢集団活動を充実させ、人間関係を深めます。」について**

日々の縦割り班清掃では、班長が班員に抱く課題を指導者が察知し指導にあたることができている。また、そうした経験を通して班長も多くを学びます。また、異学年の児童と一緒に遊ぶ取組「キッズタイム」では、6年生が活動を企画し、下級生は自分が選んだ活動に参加します。活動中は、児童の主体性を尊重し、教職員は安全面等の確保の視点から活動を見守る形で進めています。しかしながら、6年生の負担も大きく、来年度は活動回数を減らして取り組むことにしています。そのことにより異年齢集団活動自体が減少するものではないと考えています。運動会等の行事を通して、また、授業を通して異年齢と交わりながら活動することは十分に考えられます。それらを有機的に意味付けしていくことで今後もより望ましい集団の一員として活動できるように設定していきたいと考えています。

**3 「身体をきたえる子ども」**

No	項目	児童	教職員	保護者
7	<b>運動に親しみ、体力の向上に進んで取り組む活動を充実させます。</b> ※『若小キッズの振り返り』での肯定評価 80%以上	90 (+1)	75 (-20)	94 (+4)
8	<b>「早寝・早起き」「食育」など健康的な生活習慣を育む取組を行います。</b> ※『若小キッズの振り返り』での肯定評価 80%以上	86 (-6)	90 (+20)	91 (+8)
9	<b>メディアコントロールの習慣や情報モラルを身に付ける活動を充実させます。</b> ※『若小キッズの振り返り』での肯定評価 80%以上	77 (-5)	90 (+20)	86 (+6)

**No. 7 「運動に親しみ、技術の習得や体力の向上に取り組む活動を充実させます。」について**

運動習慣の形成、体力向上に関しては、児童・保護者とも高い評価となっています。一方で教職員の結果が低くなってしまいました。その理由に「熊対策のため外での活動ができなかった」が多く挙げられました。今年度は不測の事態が発生してしまい、屋外での活動が十分に確保できませんでした。今後は、屋内でもできるサーキットトレーニングを取り入れる等の工夫した活動を検討していきたいと考えています。子供たちの「体を動かしたい」という気持ちと運動の目的を大切にしながらも、現状でできる活動を吟味していく必要があります。

**No. 8 「『早寝・早起き』『食育』など、健康的な生活習慣を育む取組を行います。」について**

健康的な習慣の育成については、中間評価と比べると教職員の評価が著しく向上しています。これも偏にお家の方々のご協力があった結果だと深く感謝申し上げます。引き続きご協力くださいますようお願いいたします。また、学校でも校内ワーキンググループを主軸に教職員全体で共有しながら効果的な指導を今後も継続していきます。

**No. 9 「メディアコントロールの習慣や情報モラルを身に付ける指導を充実させます。」について**

ネット・ゲーム宣言や「我が家のきまり」を決めて取り組むこと、学校では学年の発達段階に応じた情報モラルの指導を行うことを取組の柱にしています。また、月に一度の情報モラル指導に加え、外部講師を招いた家庭教育学級も実施しました。町内では「岩泉情報モラルの日（意志の日）」として、2カ月に一回、14日を情報モラルの強化日として取り組んでいます。そんな中で注視したいのは子供たちの意識が77%と目標値に達していない部分についてです。中間評価時よりもマイナス5ポイントとなっています。自分自身でメディアコントロールがうまくできていないと実感している子供たちがまだまだいるということです。その反面、教職員の意識はプラス20ポイントとなっています。これは、様々な取り組みや活動が計画通りに行えたことを評価しての結果だと捉えることができます。子供たちと教職員の意識に乖離が見られたことは、とてもいい機会として捉えました。より有効な取組を学校内で吟味していくことができるからです。子供たちを主体とした取組、子供たちが「自分ごと」として捉えられる取組を今後吟味していく必要があります。

※家庭の取組については、次号でお知らせします。